

特集 「戦後70年」 連続ワークシヨップについて 2

前号(13号)に引き続いて、科学研究費(基盤B)「核・原爆と表象／文学に関する総合的研究」(研究課題番号：26284038 代表：川口隆行)と共催した「戦後70年」連続ワークシヨップを特集する。このワークシヨップの意義については、「Ⅰ 原爆文学「古典」再読1——井伏鱒二『黒い雨』」、「Ⅱ 原爆体験の〈表現〉と〈運動〉——60・70年代を中心に」を掲載した前号で説明したので繰り返さない。

本号の特集は、昨年一二月から本年八月まで三回に渡って開催した六つのワークシヨップ、「Ⅲ 古典詩と現代詩の協奏——実作者を迎えて」、「Ⅳ カタストロフィと〈詩〉」、「Ⅴ 原爆文学「古典」再読2——佐多稲子『樹影』」、「Ⅵ 長崎原爆と復興の言説」、「Ⅶ 原爆文学「古典」再読3——大田洋子『屍の街』」、「Ⅷ 広島から問う、「原爆文学」と「戦後70年」」によって構成されている。

「Ⅲ 古典詩と現代詩の協奏」のうちイナン・オネル・新井高子「震災と戦争、トルコと日本の間でヒクメットの詩を読む」は共著であるが、彙報を確認すれば分かるように、ワークシヨップに登壇したのは新井氏のみである。当日、新井氏はヒクメットの

詩とともに特集『ベットと織機』から自作の詩も朗読、紹介されたが、誌面化にあたってはヒクメットの詩の紹介に照準をあてることにした。ヒクメットの訳者であるイナン・オネル氏の名前が掲載されているのはそのためである。また、「Ⅳ 長崎原爆と復興の言説」は、科学研究費補助金(若手研究B「被爆と復興をめぐる文学・文化の研究——長崎を中心に」研究課題番号：15K16693 代表：楠田剛士)の成果の一部分でもある。

「戦後70年」連続ワークシヨップはこれでとりあえず終える。とはいえ、「文学」を通しての「戦後」や「原爆」をめぐる問いは今後も続くだろう。本号が刊行される二〇一五年一二月には国際会議「核・原爆と表象／文学——原爆文学の彼方へ——」を開催し、その成果は次号(15号、二〇一六年八月刊行予定)に掲載する予定である。これもまた期待されたい。

最後になるが、濃密なワークシヨップを一年という短い期間で集中して開催できたのは、本研究会の会員、さらには非会員の方々への厚意の賜物である。心から御礼申し上げたい。(川口隆行)